

絆

丸亀市会員 藤井 紀子

2018年3月16日朝、私は、7名の高校生と2名の教員とともに、成田空港にて、デュッセルドルフ空港行きの飛行機に搭乗した。これは、その前年9月19日に、藤井学園（丸亀市）と聖ベルンハルト・ギムナジウム（ヴィリッヒ市）との姉妹校提携に基づくものであった。偶数年は藤井学園から、また奇数年は聖ベルンハルト・ギムナジウムから、生徒を相互派遣し、受け入れ校が準備した遠足などに参加しつつ、ホームステイ（生徒1人につき1家庭）を通して一般家庭の生活も体験できるというプログラムである。7名の生徒たちは、事前に英語やドイツ語の特別レッスンを受け、並々ならぬ期待を胸に、いよいよ訪独の時を迎えた。

デュッセルドルフ空港での入国審査を終え、緊張しながら聖ベルンハルト・ギムナジウムに向かった。校内でホストファミリーと対面したときは、照れてしまい、ごちない生徒が大半だった。到着の翌日・翌々日は、土曜日と日曜日。週末は各自ホストファミリーと過ごすことになっていたため、コミュニケーションがきちんと取れるだろうか、（3月には珍しく雪が降っており、気温が氷点下になることもあったので）体調を崩さないだろうか、生徒たちのことを心配していた。しかし、幸い杞憂に終わった。一緒に観光名所に出かけたり、家で料理をしたりして、その2日間で一気に距離が近くなったようだ。週が明けて学校で会った彼らの目は輝き、週末の出来事を私に話してくれた。

遠足で行った歴史博物館（ボン）では、戦後ドイツの歴史を学んだ。日本で学んだドイツは、教科書という紙の上の遠い異国であったはずなのに、展示物の一つ一つが活きた歴史教材として目に飛び込んできた。同日訪れたケルン大聖堂では、歴史の重みと荘厳な美しさに、ただただ圧倒された。写真に収めようと思っても、収めきれないほどのスケールの大きさに、生徒たちの世界観が広がっていくのが見て取れた。

日本人生徒は、各自の特技や趣味を活かして、ドイツ人生徒と交流を深めた。例えば、茶道を披露したり、あやとりや折り紙を紹介したり、丸亀音頭を披露したりした。これらを体験したドイツ人生徒は、日本文化の一端に触れることができた。フルートを披露した日本人生徒もあり、ドイツ人生徒に良い刺激を与えた。日本人生徒は「親善大使」としての役割を立派に果たしていた。教員2名の活躍も見逃せない。1名はドイツ人生徒の前で、丸亀のうちわや丸亀市の歴史などについて社会科の授業を行った。もう1名も、自身の経験を活かし、日本の国技である相撲の講演とデモンストレーションを行った。どちらもドイツ人の心を捉え、会場が大いに盛り上がった。

公式歓迎式典は、ネルゼン城（ヴィリッヒ市の市庁舎）と在デュッセルドルフ日本国総領事公邸の2か所で行われた。ネルゼン城では日本で練習してきた「野ばら」（ドイツ語）と「ふるさと」（日本語）の歌を披露した。その場面は現地新聞で報道されるほど、ドイツ人の心をつかんだ。在デュッセルドルフ日本国総領事公邸では校歌を披露し、喝采を浴びた。

こうして、世話役になってくれたドイツ人生徒と出掛けたり、学食で食事を取ったりといった、ドイツで過ごす何気ない瞬間が、日本人生徒にとっては初体験のことばかりで、貴重な時間であった。

しかし、悲しいことに、とうとう別れの日がやってきてしまう。送別会では、ホストファミリーとの別れを惜しんで涙する生徒を見ていると、こちらまで胸が熱くなった。「外交」というと、安倍晋三首相とアンゲラ・メルケル首相が会談することのように思いがちだが、決してそれだけではない。彼らの涙を見ていて、人と人との絆、それこそが「外交」の根底にあるものだと感じた。若者同士であれば、価値観の違いや地理的な隔たりなど、いとも簡単に乗り越えて、より純粹にお互いを尊重し合い、心を通じ合わせる絆が生まれるのだらうと、明るい未来が見えた。今回交流した若者が、この10日間で得た経験を糧にして、将来、日独の懸け橋として活躍してくれることを心から祈念している。

※聖ベルンハルト・ギムナジウム (St. Bernhard Gymnasium): 1946年創立。ドイツ・ヴェリッヒ市 (デュッセルドルフより車で20~30分程度) にある、大学進学を前提とした中高一貫校。生徒数約1000名。教職員数約90名。

